

筑波大学附属久里浜特別支援学校の「いま」

本校の前身は、国立久里浜養護学校で、文部省(現文部科学省)直轄の障害児学校として、重度重複障害児を対象に昭和48年に開校されました。

その後、平成16年からは、筑波大学附属の知的障害を伴う自閉症児の教育を研究する学校として再出発し、平成22年度までの7年間、文部科学省の研究開発学校の指定を受け、主に教育課程の開発研究を進めてきました。

平成23年度以降は、自立活動を中心に指導法の研究開発をはじめ、子どもの「思い」や「考え」などの情動や「表現する力」に視点を据えた指導法や個々の子供たちの実態把握と必要性や根拠に基づいた指導法の開発や実践を通じての事例研究に取り組んできました。そして、平成27年度からは、授業研究やその改善を通じて、これまでに開発し実践してきた教育課程の見直しに着手しています。こうした実践や研究の成果は、毎年「自閉症教育実践研究協議会」を開催し、全国の知的特別支援学校等に発信しています。

1 本校の教育目標

本校では、「子供一人一人の良さや可能性を伸ばし、自立し社会参加するための基礎を培うことを目指す」ことを教育の目標としています。

本校に在籍している、知的障害に自閉症を併せた子供たちの障害の状態及び発達段階、特性等は多種多様です。そこで、個々の子供の様々な実態に応じた、適切な指導

を行い、それぞれのもつている可能性を最大限に伸ばすことが本校における教育の基本です。

特に、子供一人一人の良さや可能性を伸ばすとともに、それぞれの発達段階に応じた知識・技能等の習得を図り、自立し社会参加するための基礎を培うことを目指しています。

2 教育の具体目標

本校で実践している教育の具体的な目標は以下の3点となります。

- (1) 人とのかわわりを楽しむ子供を育てる。
自立し社会参加するために必要な力は、人とのかわわりを通して育まれます。人への関心やかかわるための力を育て、人とのかわわりを楽しむことができるように指導していきます。



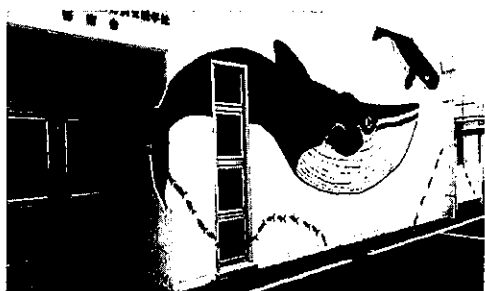
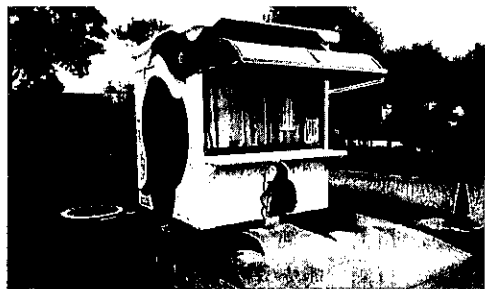
学校の遠景と小学部玄関

3 学校運営の方針

本校は、これまで知的障害に自閉症を併せた子供たちのための教育課程を開発してきました。この数年は、その教育課程を基盤に、一人一人の「思いや考え」を大切に、望ましい行動を育てる実践を重ねています。

こうした経緯を踏まえ、今後は、教職員、保護者、関係者が連携し、一人一人の子供が「確かに育つ学校」を目指します。

子供を確かに育てるためには、一人一人の過去の成長の経過を踏まえ、現在の教育的ニーズに合致した指導をしなければなりません。子供にかかわる関係者が情報や



学校デザインプロジェクト

知恵を結集し、指導に当たることが求められています。教職員一同は、指導の根拠を明らかにしつつ、指導を評価し改善することを重ねることによって、子供の成長を追求することが可能となると考えています。そして、子供が「確かに育つ」ことを関係者とともに検証し、それを国内外に向け発信することによって、筑波大学附属学校として求められる先導的拠点、教師教育拠点、国際教育拠点としての役割が果たせるものと考えています。

4 幼稚部の教育

幼稚部では、子どもたち一人一人の様々な可能性を伸ばし、幼児期という人生のはじめの一步が、子どもたちにとってかけがえのないものとなるような生活づくりを目指しています。



イチゴ狩り

幼稚部の保育においては、一人一人の幼児に於いて、安心できる環境の中で、人との信頼関係を育み、その上で、人や物とのかかわりを広げ、コミュニケーション能力の向上を図ること、生活全体を通して、自分の好きなことや、やりたいこと、自分のできることを増やし、意欲的、主体的に取り組む中で達成感や満足感を味わうこと、基本的な日常生活動作の獲得を図ることをねらい、指導に当たっています。

3～5歳の年齢別の学級を基本の集団とし、一人一人の子供が学級の教師、友達、環境に安心感をもち、自主性を発揮できるように、学級の子供の実態に応じた日課内容、時間、場所、体制)を工夫して指導を行っています。指導内容のうち「朝の遊び」では、各教室に物を操作して遊ぶおもちゃやままごと、絵本と関連した道具や人形、お絵描きや工作のコーナーを、プレイスペースには、

吊り遊具やトランポリン、スクリーンカー、ボールなどの運動遊具と季節の掲示物を用意し、子供たちがそれぞれ好きな遊びに向かい、身近な教師と関わって遊ぶことを大切にしています。「遊び活動(素材遊び、音楽遊び、運動遊び)」「なかよしタイム(社会生活の指導)」「のびのびタイム(自立活動の指導)」では、学級を基本にしつつ、子供の興味・関心等の実態に応じてグループの形態で活動に取り組んでいます。「個別の課題学習」と「自立課題」では、一人一人の認知やコミュニケーションの実態に応じて、一対一の楽しい遊びの中に課題を取り入れて指導しています。「朝の集まり」や「給食の集まり」、「帰りの集まり」では、集団への参加の基礎を育てるため、活動の中で友達や教師を意識し、一緒に取り組むことに意味をもてるように指導に当たっています。また、年間を通して季節の行事、自然や文化的な体験も大切にして活動内容を設定しています。

5 小学部の教育

小学部の教育課程は、生活活動の指導、社会生活の指導、余暇活動の指導、知的障害特別支援学校の各教科、自立活動等から編成されています。特に、「個別の課題学習」として国語・算数・自立活動の内容について、児童個々の実態や課題に合わせた指導を行っていること、「のびのびタイム」として、

児童を、低学年・高学年それぞれで実態や課題を考慮した縦割りの学習グループを編成し、小集団の形で自立活動の時間における指導等を行っていることが大きな特色です。

小学部では、次の4つを指導の柱として、個々の児童の実態や特性に応じた教育活動を



海外からの留学教員との交流

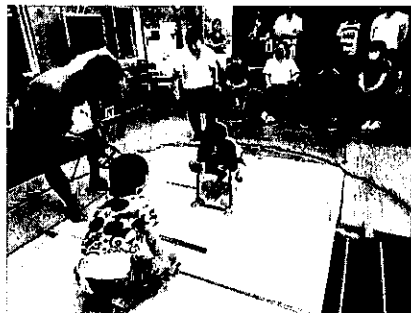
展開しています。

- ① 心身の調和的発達を目指し、健康で規則正しい生活をする力を育てる。
- ② 身近な大人や友達との関わりを広げ、適切なコミュニケーション力を育てる。
- ③ 様々な体験活動等を通して、基礎的な知識や技能を身に付けるとともに、一人一人が気づき考えることを大切にし、感じたことや考えたことを自ら表現できる力を育てる。
- ④ 好きなことや得意なことを見つけ、進んで物事に取り組みもうとする態度を養う。

6 寄宿舎の教育

本校には知的特別支援学校では珍しい寄宿舎があり、県外や県内に自宅があるものの、通学が困難な子供たち6名が生活しています。

教室担任や保護者との連携を密にして、退舎後の家庭生活及び地域生活を見据え、好ましい人間関係を基盤としながら、基本的生活習慣の確立と生きる力の育成を図ることを目指した指導を行っています。また、誕生会やクリスマス会等の各種行事を企画することで、子供たちが楽しく寄宿舎生活を送れるような配慮も行っていきます。



寄宿舎お相撲大会

7 特色のある教育活動

○自閉症教育の先導的な拠点として

本校は、平成16年度より2期7年間、文部科学省から研究開発学校の指定を受け、「自閉症児のための教育課程」に関する開発研究に取り組みました。特に、幼児期

から児童期までの一貫した教育カリキュラムを開発し、その成果を毎年2月に自閉症教育実践研究協議会の場で、全国に発信し続けてまいりました。平成23年度以降は、「知的障害を伴う自閉症幼児児童のための自立活動の指導」思い、考え、行動する子どもの育成を目指した授業づくり」をテーマに掲げ、全教職員一丸となって、研究活動や授業改善に取り組みました。これまでの成果をもとに、自閉症児のための指導法や教材に関して、「明日から使える自閉症教育のポイント」という書籍にまとめています。

平成24年度には、アメリカ・ノースカロライナ州ウィルミントンにあるTEACHセンターから、センター長他2名の教育心理士をお呼びし、自閉症幼児の指導のための研修プログラム「Ready, set, go!」を本校向けにアレンジしてもらい、教職員全員で4日間にわたる研修を行うなど、全教職員の指導力の向上に向けた取り組みも行っています。

平成27年度からの研究テーマは、「子供たち一人一人が確かに育つ授業づくり」とし、子どもに対する根拠のある実態把握と的確な指導計画に基づく授業実践を重ねています。そのため、日常的にアセスメントや指導法を見直しながら、授業研究会と事例検討会を繰り返して行っています。

○教師教育拠点として

学校公開、公開セミナー、研究協議会などには、毎年全国から六百名程度の参加者があります。日常的な学校見学を目的とした来校者は、現職教員を中心に八百名近くにのびります。この中で、平成24年度はカンボジア・ポリビア・インドネシア・ドイツなど8カ国から約80名の教員や行政機関の職員、大学の研究者など



免許状更新講習(教材づくり)

が視察に訪れました。

また、大学が主催する「免許状更新講習」事業の附属学校実践演習や「免許法認定公開講座」などにも積極的に協力し、全国の教員研修や教員の資質向上に寄与しています。

教育実習や介護体験は、筑波大学だけでなく、神奈川県下の国立大学などからも学生の受入を行っています。

平成25年度からは、海外の大学からの研修生や国内の普通校の特別支援学級の担当教員、他の国立大学附属の特別支援学校の教員等を内地留学生として受け入れた研修も行っています。

平成28年には、「幼稚部の教員が中心となって、「知的障害を伴う自閉症幼児教育研究会」を立ち上げました。この研究会では、教育関係者だけでなく、福祉・医療関係者や大学の研究者・学生なども交えて、自閉症の幼児教育の課題を共有し、指導法等の改善を広く深めていく予定でいます。

○国際教育拠点として

平成21年度より中国浙江省寧波市にある達敏学校（知的特別支援学校）との交流を開始し、同校の教員が本校を訪れ、自閉症児教育の研修を積んでいたいただきました。その後、平成23年度には、本校の教員が同校を訪問するとともに、併せて姉妹校協定を締結しました。

同校は、中国華東師範大学や附属する自閉症研究センターとの交流も盛んなことから、本校との親密な連携のもと、今後の中国国内での自閉症教育の拠点としての発展を求めています。本校への期待も高いものがあります。平成25年度は達敏学校に加え、本校の教員が、中国江蘇省蘇州市にある蘇州工業園区仁愛学校と上海市の華東師範大学特殊教育学院と自閉症研究センターを訪問しまし



学校公開

た。平成27年からは、本校での授業場面などのネット配信やテレビ会議システムを利用した両校教員同士での授業研究会、合同ケースカンファレンスの開催などを行うことで、同国に対する自閉症教育の支援を積極的に行っています。

この他、東南アジアをはじめ、南米やアフリカなどの諸外国の障害児教育関係者の視察を積極的に受け入れ、諸外国の自閉症教育を支援する活動も積極的に行っています。



中国とのSkypeによる授業研究会

○自閉症啓発の取り組み

平成22年度から、世界自閉症啓発デーの取り組みに合わせ、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所との共催により、毎年5月に「世界自閉症啓発デーin横須賀」を企画・開催し、地域での自閉症児の理解と自閉症教育の成果の発信に努めています。

平成25年度以降は、毎年12月の横須賀市の障害者週間に開催することで、この取り組みが横須賀市の教育委員会や障害福祉課の後援を得るまでになり、本校の存在や自閉症教育に関する理解を広めることができつつあります。



自閉症啓発デーのご案内